



私も京都外大図書館を応援します(9)

「趣味を仕事に生かして」

黒田 茂さん



シェイクスピアの『ファースト・フォーリオ』、ルイス・フロイスの『書簡』、『欽定訳聖書』、ナポレオンの『エジプト誌』、シーボルトの『日本』、デイドロとダランベールの『百科全書』など、本学図書館が所蔵している貴重書の名前が次々と突いて出る。「外国語大学の図書館として、このような稀覯書(きこうしょ)を収集されていることが、素晴らしいことで外(学外)から見れば大きな特徴になっています」と、お褒めの言葉をいただいた。

国内有数の西洋古書店に勤めはじめて14年が経つそうである。お正月の休暇を利用して、お客さまから頼まれた本を探しに東京の古書店まで行くこともあるといわれるほどの商売熱心。このインタビューに先立って「ここでは、商売は抜きですよ」とのこちらの姿勢に、笑いながら「子どものころから本が好きで、本は友達です。ただ、書物のことをあれこれ語るのは楽しいのです」。今も休日にはご自宅のある東大阪の大阪府立中央図書館に子どもさんと共に通い、本を借りて帰って読み聞かせをされており、「これが、一番の家族サービス」だそうだ。

ご本人はアメリカの作家トマス・ウルフの『天使よ故郷を見よ』の作品研究を学生時代から続けられ、卒業後にはさらに深さを極められた。その成果はトマス・ウルフ生誕100周年記念論文集である『人間と世界』(金星堂)に掲載されている。「大学の研究者ばかりの中で、会社勤めの執筆者は私だけでした」と言われるだけあって、たいへん熱心な研究者である。その糧となる読書は主に往復3時間の通勤電車の中だそうで、最近の読書の範囲は「論語」にまで及んでいる。

彼の幅広い知識は、彼と同じく東大阪市の市民であった今は亡き司馬遼太郎氏の話に及び、「司馬さんが新しい歴史小説を企画されると、東京の神田の古本屋街からその関連の図書が消える。それらの本は全て東大阪へ移った。」という有名なエピソードを紹介される。「私には司馬さんのような資料を集める資金力がないので、様々な図書館を利用させていただいています」。最近、本学図書館の市民利用制度にも登録された。「おもに『英語青年』など、学術雑誌のバックナンバーを使わせていただいています」と、本学図書館が情報源の一つになっていることも語ってもらった。

「知識を仕事に生かして社会貢献ができれば幸せ」と言われるように、幼い頃からの読書好きが趣味となり、ひた向きの熱心さも加わって、さらに職業にも生かされている。まさに、社会人としての理想的な生き方を実現されているのである。

.....

くろだ しげる さん(雄松堂京都株式会社営業部課長)

(聞き手・文)奥 正敬